

## 「野火」論：「離人症」を手がかりに

河内，重雄  
九州大学大学院人文科学府博士後期課程一年

<https://doi.org/10.15017/8492>

---

出版情報：九大日文．6，pp.59-79，2005-06-01．九州大学日本語学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：



# 「野火」論

——「離人症」を手がかりに——

河内 重雄  
カウチノカウチ  
ウヰラノカウチ

一 はじめに

作品や書簡全てからトータルとしての（それ故、しばしば目的論的に）作家像（大岡昇平像）を作り出し、そのような形で作られた以上、もはや作品の読みには用いられないにもかかわらず、「野火」（『展望』昭和二十六年一月号―八月号）本文の読みをそのよくな作家像に沿う形で再生産するというようなことが（そうとは気付かないまま）しばしばなされているが、本稿はそのような研究の状況に新しい風を吹き込むことを目標にしている。そこで、「野火」本文に見られる「離人症」（三三八、再び野火に）に注目してみようと思う。トータルとしての作家像ではなく、「離人症」を中心に据えるとき、一つ一つの文章や単語はこれまでとは違った解釈を受け入れることだろう。

さて、その「離人症」だが、どのようなものと考え得るのであろうか。試みに新福尚武・池田数好著『人格喪失感（離人症）』（昭和二十九年七月、みすず書房）を用いてみると、

一 「人格喪失感」という場合の「人格」はパーズナリティの意味の人格ではなく、自我という意味の人格である。従つて、人格喪失感とは自我喪失感と言うことも出来るし、また離人症とも呼ばれる。「身体感覚であれ、知覚、記憶、感情、思考、行為であれ、それが「私の」、「私自身の」、「私固有の」はたらきだ」という体験調をもつて感じられ」ないといった、

①自我の分裂  
という特徴がある（自己同一性の絶対性を剥ぎ取るために比較の対象として用いられるのはこれである）。

二 「患者によつては質問者の推測的な形容に容易に同意するものもあるが、なかなか賛成しない者がむしろ多い。どうしても表現、伝達できない感じだという。患者の体験であるから、体験の深淺、表現技術の巧拙、教養、性格によることは言うまでもない」とあり、自分（離人症患者）の感覚や見出している世界を表現するには高い知的水準と表現能力が必要とされる。「野火」の「私」（田村一等兵）が「インテリ」（三五、猿）と名指されていることが思い出される。

三 ②「景色を見ても、人を見ても生気がない。感じがらない。実感がわかない。新鮮味がない。ピツタリしない。目に映るが頭に入らない。遠景をぼーつと見るようだ。全体がぼやけてはつきりしない。夢の中のような。墨を流したようだ。何かをとおして見ているようだ。初めて見る感じ。頭が無感覚で何が何

だかよく判らぬ」、③「東西がさつぱり分らぬ。方向がてんで分らなくなつた。向うがどれくらい距離があるのかさつぱり見当がつかぬ」、④「親の顔を想い浮べることが出来ない。過去のことを思い出せぬ。昔のことを思つても自分のことではないようだ。自分がやつたように思われぬ」、「自宅の構造、間どり、形もはつきりと頭に浮びません。地球上に初めて生れて来たよ  
うな、何もかも初めて経験するような気持です」、⑤「何だか時間がたちません、停止したよう  
で。診察に入る時に時計を見たので、今は五時だと知つています。しかし、朝のようでもあ  
るし、昼のような気もします」、「今は十月です。が、秋のよう  
でも、冬のように、春のようでもあります」、⑥「体の連絡  
がとれてない。体がふらふらして一緒に働かない。首から上と  
下と繋がつていない」、⑦「音が遠くに聞えるようだ。遠いところから音がしてくる。耳が聞えない」、「話している人の声  
が何だかこの世の声ではないような感じ  
です」、⑧「感情がなくなつた。面白くも悲しくもない。感情が潤れてしまつた。何  
一つ私を感動させるものがなくなつた。物を見ても楽しむことが  
出来ない。さつぱり人の気持が通じない。笑つても私の気持は  
笑つていない」、⑨「頭が全然はたらかない。人の頭の中から  
考えているようだ。人の言つたことが少しも判らぬ。考えられ  
ない。新聞を読んでも意味が全然判らない」、⑩「ご飯は食べ  
ます。しかし味はありません。腹にもたまりません。腹に力が  
入りません」などの報告から、離人症患者には一及び二を土台  
としたところの、

②風景（知覚）の（分節的・言語的）不統一性

③方向感覚の喪失

④自分の記憶と感じられないが故の記憶の喪失（記憶そのものは残っているが用い難い）

⑤時間感覚の喪失

⑥身体の不随意

⑦幻聴のような、音の異質化（一からして、これは自分の声なども例外ではあるまい）

⑧感情の喪失

⑨思考の喪失

⑩味覚の喪失

つまりは限定的な意味での内的世界の非言語化がみられる。

四 離人症はもちろん精神分裂病の一つだが、他の精神分裂病（とその症状）との関係については（二十一世紀の今もなお）未解決である（他の精神分裂病の症状との共存は現実には認められる）。離人症の症状にしても、どの症状がどの程度出るのかには個人差があり、「徐々に起ることもあり、急に起ることもある。また持続的であることもあり、短時間発作様に起ることもある。時折感じられることもあり、頻回反復することもある」。

といったことが書かれている。木村敏著『時間と自己』（昭和五十七年十一月 中央公論社）には「時間の流れもひどくおかしい。時間がばらばらになつてしまつて、ちつとも先へ進んで行かな

い。てんでばらばらでつなりのない無数のいまが、いま、いま、いま、いま、と無茶苦茶に出てくるだけで、なんの規則もまとまりもない」といった体験もあり、離人症患者の、

⑩時間軸の欠如、そのような形で記憶の蓄積（時間軸をもたない記憶）

がうかがえる。これらは今日の離人症観とさほど変わらないと言えよう。本稿では、「離人症」をこのようなものと考ええる限りにおいて、テキストがどのように読めるのかを検討したい。

## 二 健全な自我と「離人症」

「離人症」をこのように意味付け、本文に目を向けてみると、本文中の「野火」や人肉食（及び食べる対象としての死体）に関する記述に「離人症」の症状を見出すことが出来るように思われる（これらが「離人症」の原因と考えられる根拠については次章で述べる）。いくつか挙げてみよう。

I 今それを記述しようとして、私がいかにそれを「見て」さえいなかっただかを知る。怯えた兵士として、初めそれを認知しなかつたばかりではなく、認知した後も、眼はその細部を辿ることが出来なかつた。まずそれを屍体と認めた眼は、既知の人間の形態を予期しつつ、その上を移動したが、眼は常に異様な変形によつて裏切られたのである。

露出した腕と背中は、皮膚の張力の許すかぎり、人体の

比例を無視した大きさに膨脹し、赤銅色に輝いていた。或る者の横腹からは、親指ほどの腸が垂れ下っていた。弾丸の入った跡であろうが、穴の痕跡はなく、周囲の肉の膨脹が、その腸をソーセージのようにくびつていた。

頭部は蜂にさされたように膨れ上っていた。頭髮は分解する組織から滲み出た液体のため、膠で固めたように皮膚にへばりつき、不分明な境界をなして、額に移行していた。

以来私はこの光景を思い出すことなく、都会の洋裁店等に飾られた蠟人形の、漠然たる生え際を見ることが出来ない。

頬はふくらみ、口は尖っていた。その不動な表情は、強いていえば「考える猫」に似ていた。

或る者は他の者の脚に頭を載せ、或る者はその肩を抱いていた。伏した或る者の臀部の服は破れ、骨が現われていた。私はこの無人の村に、犬と鳥のみ多い理由を知った。

（略）

私は屍体の群を迂回し、会堂の階段を上った。内部は整頓されていた。両側の高い窓から差す光が快い調和を作つて、木の床やベンチに積つた埃を照し出していた。大きな帆立貝で作つた聖水盤の水は干上つていた。（略）

床の埃に伏して私は泣いた。十字架に曳かれて降りて来た敬虔なる私が、何故ただ同胞の惨死体と、下手な宗教画家の描いたイエスの刑死体だけを見なければならぬのか。私をここに導いた運命が誤っているか、私の心が誤っているか、そのいずれかである。

「デ・プロフンデイス」

昨夜夢で私自身の口から聞いた言葉が響き渡った。私は振り向いた。声は背後階上の、合唱隊席から来たように思われたからである。

しかし眼は声の主を探しながら、私はそれが私の幻聴であるのを意識していた。その声は誰か、たしかに私の知っている人の声だと私は感じたが、その時誰であるかは思いつけなかつた。

今一では知っている。それは昂奮した時の私自身の声だつたのである。(⑦幻聴のような、音の異質化―筆者注)。もし現在私が狂っているとすれば、それはこの時からである。

「われ深き淵より汝を呼べり。主よねがはくはわが声をきき……」

少年の時暗誦した旧約の詩句が頭の中で甦った。しかし会堂の天井に添って移行する私の眼に映る、比島の見すばらしい会堂の内部には、何も私の呼声に答えるものはなかつた。

「われ山にむかひて目をあぐ、わが助けはいづこより来るや」

この時私は私自身と外界との關係が、きつぱりと断ち切られたのを意識した。(①自我の分裂―筆者注。地上で私の救いを呼ぶ声に応えるものは何もない。それは諦めねばならぬ、と思ひ定めた。

(二七 物体)―二八 デ・プロフンデイス)

## II

到るところに屍体があつた。生々しい血と臓腑が、雨あがりの陽光を受けて光つた。ちぎれた腕や足が、人形の部分のように、草の中にくろがつていた。生きて動くものは、蠅だけであつた。

ここに私の最も思い出し難い時期が始まる。それからなお幾日か、私が独りで歩いた時間は、曆によつて確認されるが、その間私が何をし、何を考えたかを思い出すのに、著しい困難を感じる。(略)

私が生きていたのはたしかであつた。しかし私には生きていけるという意識がなかつた。(①自我の分裂―筆者注)。

(二七 火)

## III

私はあの忘却の灰色の期間が、処々、粒を立てたように、野火の映像で占められているのを感じる。それに伴う何の感情も思考もない。(⑧感情の喪失・⑨思考の喪失―筆者注)が、映像だけは真実である。

(二三八 再び野火に)

## IV

一つの幅の広い野火の映像は、その下部に焰の舌を見せて、盛んに立ち騰つていた。別の細い野火は上が折釘のように曲つて、回転する磁石の針のように揺れていた。それは殆んど、意のままに変形し得るように思われた。(略)

野火の形は最初中隊を出た時見たものに似ていたが、その時はたしかにその下まで行きはしなかつたから、燃燒物

は私がああ忘却の間に見たものに違いない。

私はさらに、その燃える粉殻や草が、それぞれ一つの煙に密着していると感ずる(②風景(知覚)の(分節的・言語的)不統一性。このことについては後で詳しく述べる―筆者注)。意識の空間に密着したそれ等の番い(⑩時間軸の欠如、そのような形での記憶の蓄積(時間軸をもたない記憶)―筆者注)は、それぞれの時間の密着を示すべきである。

このことは私が一つの煙を見、次にその煙の下に行ったことを示している。煙を見れば、必ずそこへ行ったのだ。しかし何のために?―思いつけない。私の記憶はまた白紙である。ただこの「行った」という仮定から、一つの姿が浮び上る。

再び銃を肩に、丘と野の間を歩く私の姿である。緑の軍衣は色褪せて薄茶色になり、袖と肩は破れている。裸足だ。数歩先を歩いて行く瘦せた頸の凹みは、たしかに私、田村一等兵である。

それでは今その私を見ている私は何だろう……やはり私である。一体私が二人いてはいけないなんて誰がきめた。

(三九 死者の書)

簡単に補足しておこう。

まずⅠ、Ⅱについてだが、「野火」において動物は、敵として「私(田村)によって意識されることもあるが、それ以上に(食べる対象)として意識されていると考えられる。そのこと

がうかがえる箇所をいくつか挙げてみると、

しかし私が次に考えたのは、やはり彼等を捕えることであった。私は日本の鶏のように肥満していない彼等が、よく飛ぶのを知っていた。私は慎重に近より、不意打しようとした。しかし、彼等は私が手を延ばす前に一斉に飛び立ち、遠い地面に降りた。

私は地に伏して銃を構え、慎重に覗いて撃った。彼等はグライダーほどの角度で飛び立ち、斜面を下へ、遠く飛んで着陸した。そしてさらに短く連続して鳴きながら、駆け行った。

やるせない思いが胸を走った。膂力なく射撃をよくしない私は、かつて椰子の根方に無為に横たわっていたように、今はこの極楽鳥を目の前に、飢えていなければならぬのである。

(一〇 鶏鳴)

中隊が南方の部落に宿営していた時、偶々営舎附近にさまよい寄った牛を射たことがある。骨と臓物は野に棄てられた。頭だけ原形を保ったその巨大な骨は、陽の下で忽ち腐り、日に日に堪え難い臭気を、営舎まで送って来た。我々の胃を生理的に刺戟する、つんとする臭気であった。

(一六 犬)

雨が降り、木の下に寝る私の体の露出した部分は、水に

流されて来た山蛭によって蔽われた。その私自身の血を吸った、頭の平たい、草色の可愛い奴を、私は食べてやった。

(二二七 火)

といったところかと思われる。人や死体が動物の比喻をもつて記述されている箇所が甚だ多いことは、今さら逐一列挙して証明する必要もないであろうが、「野火」における死体は食べる対象としての側面をもっているとは考えられないだろうか。このことは、動物の比喻に加えて、死体へのこだわり（記述の精緻さ）も考慮できるかもしれない。Iの死体はその記述からもそのような側面を強くもっていることは疑い得ないであろうが、IIの「生々しい血と臓腑」の大量の死体も食べる対象として意識されはしなかつただろうか。

次にIII、IVの「あの忘却の灰色の期間」(二三八 再び野火に)、「あの忘却の間」(二三九 死者の書)についてだが、(平面な記憶ではなく(そもそも忘れてしまっているということ)についてだが、これは「離人症」も原因かもしれないが、しかしそれよりはむしろ「逆行性健忘」(二三七 狂人日記)が主たる原因ではないかと思われる。「逆行性健忘」については、『心理臨床大事典』(平成十五年三月 培風館)の説明が分かりやすいので引用しておこう。

一般に、記憶は現象としては干渉あるいは時間の経過に伴って減弱するが、とくに健忘といった場合、外傷や疾病を契機にひき起こされる、個々の一定の事実や一定の期間

に限定される記憶障害をいう。この健忘のうち、外傷や疾病の後に新しいことが覚えられなくなるのが前向健忘であり、これに対して突然の疾病や外傷によって、損傷が起こる前に知っていたことが思い出せなくなるのが逆向健忘である。古い記憶ほど強固で侵されにくく、新しい記憶ほど不安定である。さらに健忘は、全般的健忘と部分的健忘とに区分されるが、多くの場合は後者である。そしてこの部分的健忘は、全体が不明瞭に追想される概率的なものと、明瞭な追想区間の中にポツポツと健忘が入る分離的なものとのに区別される。(略)

これに対して、脳にまったく異常が見いだされないのに記憶障害が起こることがある。これが心理的要因によるもので、心因健忘とよばれている一過性の健忘である。これは情緒的に動揺させられるような不快な出来事の後に起こり、障害の程度はまちまちで、逆行性全健忘が多い。この健忘で最も頻繁にみられるものがヒステリー性健忘である(→ヒステリー)。そして、この健忘がさらにひどくなった形は徘徊(はいかい)という状態で見受けられる。徘徊は意識がはつきりしないまま突然さまよい出し、その事実について完全に健忘がみられる状態として定義されている。ヒステリー性健忘を最初に包括的に説明したのはジャンネ Janet, P.であるが、現在の説はフロイト Freud, S.のそれに近く、ヒステリー性健忘を抑圧の働きによるものと考えている。この説によると、記憶は力動的なシステムであり、自

我を傷つける情報を含む記憶はシステム内で抑圧されることとなる。  
(健忘)

補足は以上で終え、本筋に戻ろう。先に挙げた四つの「野火」や人肉食の記述以外の「野火」等に目を向けてみると、なるほどそれらの記述(記憶)については時間軸的に整然としていているように思われる。しかし、それはテクスト全体にほぼ満遍なくちりばめられた風景的な意味での「自然」の記述によるためとは考えられないだろうか。もう少し言うと、「自然」に関する記述については、自我が(ほぼ)保たれている(→①自我の分裂)とは考えられないだろうか。「離人症」の(時間の非連続性)に抗うかのように、「自然」の記述には(過去・現在・未来)の意識が織り込まれている。

林の入口で道は二つに分れていた。正面は丘を越えて真直に病院へ行く道、左は林の中に丘の鼻を廻って、同じ谷間へ入る道である。丘越えの道が無論近いが、私は既に昨日から二度往復してその道に飽きていた。目的のない者の気紛れから、私は未知の林中の道を取る気になった。

林の中は暗く道は細かった。樗や櫟に似た大木の聳える間を、名も知れぬ低い雑木が隙間なく埋め、葛や蔓を張りめぐらしていた。四季の別なく落ち続ける、熱帯の落葉が道に朽ち、柔らかい感触を靴裏に伝えた。静寂の中に、新しい落葉が、武蔵野の道のようにかきこもる足許で鳴った。

私はうなだれて歩いて行つた。

奇怪な観念がすぎた。この道は私が生れて初めて通る道であるにも拘らず、私は二度とこの道を通らないであろう、という観念である。私は立ち止り、見廻した。

なんの変哲もなかった。そこには私がその名称を知らないというだけで、色々な点で故国の木に似た闊葉樹が(直立した幹と、開いた枝と、垂れた葉と)静まり返っているだけであつた。それは私がここを通るずっと前から、私が来る来ないに拘らず、こうして立っていたであろうし、いつまでもこのままでいるであろう。  
(二二道)

比島の林中の小径を再び通らないのが奇怪と感じられたのも、やはりこの時私が死を予感していたためであろう。我々はどんな辺鄙な日本の地方を行く時も、決してこういう観念には襲われぬ。好む時にまた来る可能性が、意識下に仮定されているためであろうか。してみれば我々の所謂生命感とは、今行うところを無限に繰り返し得る予感にあるのではなからうか。  
(二二道)

私は改めて目の前の水に見入った。水は私が少年の時から聞き馴れた、あの囁く音を立てて流れていた。石を越え、迂回し、後から後から忙しく現われて、流れ去っていた。それは無限に続く運動のように見えた。  
(二八川)



輝く月光の行きわたった空が、新しい渴望をもって私の眼を吸い込んだ。私はこの感覚を知っていた。渴望は容易に「生への執着」と呼び得るものであるが、それが私の胸に起す感覚は、私の平穩な生活の過去において、既知のもののように思われた。幾度か私はこういう空を、違つた緯度の下で、似通つた気持で眺めたことがあつた。(九月)

二つの岬を形づくる丘の脈は、風景の両側に、競うように緑にふくれた頂を重ねながら、この山地までつながつて来た。岬の形は見覚えがなかつた。(一一 樂園の思想)

道は人二人通るくらいの幅で真直に林を貫いていた。木々が両側に並木のように梢を光らして並んでいた。私は幾日もこれほど広い道を見ることがなかつた。

(一一四 降路)

私は歩き出した。段々飛びに明るくなって行く野に、私のほかに動くものはなかつた。草を踏み靴は露に濡れ、靴音だけが響いた。

私は自分の登音に追われるように、歩いて行つた。私はふと前にも、私がこんな風に歩いていたことがあつたと感じた。いどころであつたかは不明であるが、過去の不定な一瞬において、私はやはりこうして歩いてきた。異境の不安な黎明を歩くという情況は、確かに私にとつて初めての

経験のはずであるが、今私の感じている感情は未知ではない。

(一一四 降路)

風が吹いていた。かつて私が祖国の夏の海岸で吹かれた風と、同じ湿度と匂いを持った風であつた。日を照り返す海面を渡つて来て、私の体を孤独な一点に包み、頬をかすめ脚間を抜けて、颯々と吹き過ぎて行つた。(二六 犬)

この道は昨夜は二度と帰ることはあるまいと思つていた道であつた。その道を逆に通ることは、通らないことより、一層奇怪であつた。

(一一〇 銃)

自然は、昨日からの砲撃によつて、新しく破壊されていた。野は蟻地獄のような摺鉢状の穴で蔽われ、林の樹は幹が折れ、枝が飛んでいた。

到るところに屍体があつた。生々しい血と臓腑が、雨あがりの陽光を受けて光つた。ちぎれた腕や足が、人形の部分のように、草の中にくらがっていた。生きて動くものは、蠅だけであつた。

ここに私の最も思い出し難い時期が始まる。それからなお幾日か、私が独りで歩いた時間は、曆によつて確認されるが、その間私が何をし、何を考えたかを思い出すのに、著しい困難を感じる。(略)

川と原と草と林の、単調な繰り返しの中に、自然は砲撃

の跡を絶ち、血と臓腑を持った屍体はなくなつた。すると再びあの私のよく知っている臭いが漂い始めた。道の上、林の縁に、私は自然に死んだ者達を見た。(二七 火)

一つの谷があつた。私はその谷を前に見たことがあると思つた。

日本の鉄道の沿線で見馴れた谷であつた。車窓に近く連なつた丘が切れて、道もない小さな谷が、深く嵌入している。その谷の眺めは、少年時から、何故か私の氣に入つて、汽車がそこを通る度に、必ず窓外に眼を放つたものである。(三〇 野の百合)

次の私の記憶はその林の遠見の映像である。日本の杉林のように黒く、非情な自然であつた。私はその自然を憎んだ。(三六 転身の頌)

「自然」には他にも〈方向感覚〉や風景等の〈規則性〉なども織り込まれているが、これらは「自然」に対してゐる時の「私」(田村)の自我の健全さを示してはいないだろうか。このことについては、「自然」の記述の書き分け(「櫛や櫛に似た大木」(二道)、(「クリスマス・トリーのように」(六 夜)、(「一本の枯木が白い樹幹を光らせて倒れていた」(一五 命) など)も、以前見たような風景ではないということを実際立たせているという意味で考慮できよう。

もちろん、他の「野火」等が整然としていることについては、他にも考え得るかもしれない。例えば「一 はじめに」の四に挙げた、発症のタイミングの不確かさ。あるいは、「一 はじめに」の四をからめた、「私」(田村)の「離人症」の症状(病状)の軽さ(「まあ、それだけあなたの症状が軽いということですから、御心配はありません」、「医師が私の精神の状態を自分に納得するような、誇らかな眼で私を見据え、諾いて去つた後、私は一人庭へ出ていった。」(三八 再び野火に))。ただ、前者はともかく後者の〈軽さ〉は、自我の分裂した状態(つまり「離人症」で戦地において時折見出しつた世界(そのような形での記憶))に秩序を与えようとしている(与え得る)、戦地における「自然」から「精神病院」内にまで続く健全なる自我(「精神病院」内については、IVにおける「見ている私」が健全であることを端的に示していると言えよう。「再び銃を肩に、丘と野の間を歩く私の姿」、「たしかに私、田村一等兵である」、「その私」等とあるが、「離人症」の者はもちろん程度の差はあるにせよ、「私」という語は使い難いであろう)を指しているとは考えられないだろうか。

いづれにせよ、「私」(田村)は健全な自我の経験(「自然」を頼りに、「離人症」的経験(自己の経験ではない経験)に秩序を与えようとしている(そしてそれはある程度達成されている)、言い換えると、言語的自我を頼りに非言語的自我に秩序を与えようとしていると言えよう。

### 三 「離人症」の原因

前章ではテクストに認め得る「離人症」の症状について述べたが、本章では「私」(田村)が「離人症」になつた原因、一方で自我が健全に保たれている原因について、少し考えてみたい。

『人格喪失感(離人症)』の「第四章 発生機転についての諸

説」には、(一) 感覺説、(二) 体感説、(三) 感情説、(四) 意欲説、

(五) ジャネーの説、(六) 批判的小括の六つの項目があり、それぞれの観点から原因について考察しているが、結論としては原因は保留している。しかし、「野火」本文の「自然」の記述には、(身体でつながる(つながつたことがある・つながり得る)対象としての女性)の記述が複数見られ、「野火」や肉食にしても食べるという形での身体的つながりが含意されていると考へ得るので、(自我意識と身体)という観点からアプローチしてみようと思う。だがその前に、「野火」本文における女性的「自然」を確認しておこう(深読みかもしれないものも挙げてある)。

1 横手に彼岸花に似た褪紅色の花を交えた叢が連り、その向うの林の中で、十数人の兵士が防空壕を掘つていた。

(一) 出発

2 野が展けた。正面は一軒で林に限られたが、右は木のないう湿度が尻ひろがり遠く退いた先に、この島の脊梁をなす火山性の中央山脈の山々が重なり、前山の一支脈は延びて、正面の林の後へ張り出して来ていた。その伏した女の背中のような起伏が、次第に左へ低まり、一つの鼻でつき

たところに、幅十間ばかりの急流が現われ、丘はまたその対岸に高まつて、流れに沿つて下り、この風景の左側を囲つていた。その先に海があるはずであつた。(二) 道

3 道は林の中で丘裾の線をなぞつて自然にうねつていた。緑の丘肌が木々のあわいに輝いた。林が途切れると、丘の夢幻的な緑を形づくる雑草が、道傍まで降りて来た。平らな稜線に、人に似た矮小な木が、ぽつんと立っているのを、私は認めた。(三) 野火

4 女の背のような優美な側面は、いつか意外に厳しく狭い正面に変わり、三角の頂上から、両足をふんばつたように、二つの小尾根を左右に投げ落していた。そしてそのあわいの小さな窪みに、肱掛椅子の形の玄武岩を支えていた。先の方の尾根を廻れば、病院のある谷間へ出るかも知れない。

(三) 野火

5 病院の附近は、住民の開墾した玉蜀黍畑が草原を切り取り、収穫を終えたあらわな畦が、前面の丘裾まで続いていた。丘の稜線は、中隊の側から見ると同じ柔和な曲線を描いているが、暗緑色の雑木が、乱雑に頂上近くまで匍い上り、処々楮土が露出して、なんとなく荒れ果てた裏側の感じを与えていた。(四) 坐せる者等

私が命を断つべきは今と思われた。香わしい汁と甘い肉を持つ果実が頭上にあり、ここで私は徒らに飢えている。

もし私がいつまでもここを去らないなら、やがて樹幹に醜くしがみついて、息絶えねばならぬかも知れぬ。まだ自分の行為を選ぶ力が残っているうちに、自分に出来ることをするべきではなからうか。(略)

私は過去を探り、その時私を確めようとした。記憶はなかなか来なかった。その時私は私を取り巻く椰子の樹群が、変貌しているのに気がついた。

それは私が過去の様々な時において、様々に愛した女達に似ていた。踊子のように、葉を差し上げた若い椰子は、私の愛を容れずに去った少女であった。重い葉扇を髪のように垂れて、暗い蔭を溜めている一樹は、私への愛のため不幸に落ちた齡進んだ女であった。誇らかに四方に葉を放射した一樹は、互いに愛し合いながら、その愛を自分に告白することを許さないため、別れねばならなかった高慢な女であった。彼女達は今私の臨終を見届けるために、ここに現われたように思われた。

私は改めて彼女達と快樂を共にした瞬間を思い浮べた。或る女の腿は別の女の腕の太さしかなかった。しかし快樂の味わいは、死に近づいた私の肉体のメカニスムによって思い出に入り得ず、それに先立った渴望だけが思い出された。

私は月光の渡った空への渴望が、或る女が私が彼女を棄

てる前に私を棄てた時、私の感じた渴望に似ていることに思い当った。私の手の届かないところへ去った女の心と体に、私は手が届かないという理由で、ひたすら焦れた。

(九月)

7 一つの丘があつた。両側を細い支流に区切られて独立し、芒が馬の鬣のように、頂上まで匍匐上つていた。その形を私は何故か女陰に似ていると思つた。

(二〇 鶏鳴)

8 林が尽き、草原が月に照されて傾き、道は草の影を孕んで黒かつた。道はまた木下闇に入った。

(二四 降路)

9 林が切れ広い野に出た。月は巨大な赤い歪形となつて、遙かな林の頂にかかつていた。その弱い光は野に充滿した乳色の光と違つていた。

(二四 航路)

10 明るさは急速に増しつゝあつた。林に行き着き振り返ると、空は既に茜から青に移り、遙かに雲に閉された中央山脈の主峰の前に、端山が緑を現わし始めていた。その緑の中に褐色の斑紋を作っているのは、私の出て来た畠であると思われた。私は私のかつての樂園を、昔の女を見るような無関心で眺めた。

(二五 命)

11 左方の丘を縁どる雑木林の前に、一本の枯木が白い樹幹を

光らせて倒れていた。その狂わしく空へ張り上げた根の一条一条も、私は数えることが出来た。 (二五命)

12 道傍の木々は私を見守るように並んでいた。 (二五命)

13 遠く、固い月空の下に、私の帰って行くべき丘の群が、薄化粧した女のように、白く霞んで、静まり返っていた。 (二〇 銃)

14 雨はあがっていた。遠く海の上らしい空に、鼠色の雲が厚く重なった上から、髪束のように高い積雲が立ち、紅く染っていた。 (二六 出現)

15 万物が私を見ていた。丘々は野の末に、胸から上だけ出し、見守っていた。樹々は様々な媚態を凝らして、私の視線を捕えようとしていた。雨滴を荷った草も、或いは私を迎えるように頭をもたげ、或いは向うむきに倒れ伏して、顔だけ振り向いていた。 (三〇 野の百合)

16 草の間から一本の花が身をもたげた。直立した花梗の上に、固く身をすぼめた花冠が、音楽のように、ゆるやかに開こうとしていた。その名も知らぬ熱帯の花は芍薬に似て、淡紅色の花弁の畳まれた奥は、色褪せ湿っていた。匂いはなかった。

「あたし、食べてもいいわよ」  
と突然その花がいった。私は飢えを意識した。その時再び私の右手と左手が別々に動いた。」 (三〇 野の百合)

この他にも、女性が身体的につながる対象として意識されていることについては、「気の弱い女中の子」(永松)、「シニツクな女中強姦者」(安田)、「私の第一の直感是人目を忍ぶ恋人達が、この死の村を嬉曳の場所に選んだということであった」(一九 塩)、「笑って何か喚きながら、一人の比島の女が、車から出て来た。(略)彼女は白い歯を出し、警戒の米兵に身を寄せて、屈託なさそうに笑った」(二六 出現)、「母を犯し」(二八 飢者と狂者)、「妻に離婚を選択する自由を与えたが、驚くべきことに、彼女はそれを承諾した。しかもわが精神病医と私の病気に対する共通の関心から感傷的結合を生じ、私を見舞うのを止めた今も、あの赤松の林で嬉曳しているのを、私はここにいってもよく知っているのである」(三八 再び野火に)等も考慮できよう。

さて、〈自我意識と身体〉の関係だが、『人格喪失感(離人症)』には、

自我意識の内容として身体が体験されうることは言うまでもない。この場合も、日常的状況で意識される身体は主に体格の大小とか、容貌の美醜とかなどのような外面的差

別性である。しかし激しい苦痛とか、ひどい飢渴とか瀕死とかの非日常的な状況では、このような差別性は全く意識から消失して有機的感覚そのものが端的に意識され、身体が強く意識されるようになる。しかし更にそれらの痛苦がひどくなると、もはや痛みや飢渴のみが全意識を支配するようになり、身体意識は消褪する。(七一八頁)

という看過できない一節がある。「ひどい飢渴」により「有機的感覚そのものが端的に意識され、身体が強く意識されるようになり(自我非身体)、その飢渴がさらにひどくなると「もはや痛みや飢渴のみが全意識を支配するようになり、身体意識は消褪する」(自我非飢渴)。「飢渴」を媒介とした自我と身体、自我と飢渴のつながりの強さが読み取れるが、(特に)6の記述を見ると、この『人格喪失感(離人症)』の一節はそのまま用いられるように思われる。「私」(田村)は「手の届かない」過去の「女達」に「ひたすら焦れ」るが、しかしそれは身体的つながりが過去に実際にあつたその延長線上にあることを考えると、その焦れは「私」(田村)にとつて「満たされ得る「渴望」とは考えられないだろうか。(満たされ得る「渴望」)だからこそ、テクストの全体にわたつて(時に「渴望」の対象として)女性的「自然」が織り込まれており、満たされ得るといふ望みがあるからこそ、自我が破綻せずに(自我非飢渴)の飢渴が安定している)正常に保たれているとは考えられないだろうか。このことは、(安田達のではないが)人肉を食べながらもテクストの最後で

「殺しはしたけれど、食べなかつた」に力点を置いており、その食べた人肉にしてもその記述(意識)は一貫して「猿の肉」となつており、やはり人肉は食べていないに力点を置いている、つまり、人肉食(食べる対象がいる「野火」)については意識の上で身体的に(食べたのに食べていないと意識している以上)つながり得ない(言い換えると、人肉食の飢渴(しかし銃を持った墮天使であつた前の世の私は、人間共を懲すつもりで、実は彼等を食べたのかとも知れなかつた。野火を見れば、必ずそこに人間を探しに行った私の秘密の願望は、そこにあつたかも知れなかつた)については、持たないではいられない)にもかかわらず、永遠に「満たされ得ぬ「渴望」」(自我非飢渴)の飢渴が不安定)と考えられることからも、そう言えるように思われる。「猿の肉」について「私」(田村)が「干いたボール紙の味」を「記憶」(二三三 肉)している(↑↓⑩味覚の喪失)のも、人肉は食べていないという「私」(田村)の意識を裏付けていると言えよう。このような意味で、「この時私が彼(永松(筆者注))を撃つたかどうか、記憶が欠けている。しかし肉はたしかに食べなかつた。食べたなら、憶えているはずである」(三三六 転身の頃)と、「ボール紙の味」を憶えていることとの間にはズレがある。

以上は、(原因については保留をしつつも)『人格喪失感(離人症)』の二十七、二十八頁の、

離人症はその発病の状況についても、何れも著しい類似点を持つている。それは第一に発病に先立つ一定期間、強

い感動体験、或は持続的な感情緊張が見出されることである。第二は、これらの緊張が何らかの理由で俄かに解消乃至頓座した直後の発病が多い点であり、第三は、著しく急性に発病すること、例えば、或る病例は「頭痛がして一晩眠つて醒めると、この状態でした」と訴えており、症状はすでにその初期から強烈である。

に符合していると考えられる。「私」(田村)の「離人症」の原因は、人肉食という満たされ得ぬ飢渴をいだかざるを得なかつたことと言えるのではあるまいか。

#### 四 「離人症」とベルグソン

『心理臨床大事典』の「精神分裂病」には次のような記述が見られる(本文中の仏語は全て省略した)。

このほか、とりわけベルグソン Bergson, H. の影響を受けたミンコフスキー Minkowski, E. は、分裂病の基本障害を「現実との生ける接触の喪失」とし、「生きられた時間」である人格の躍動性を失い(貧しい自閉)、その反応として病的合理主義、病的幾何学主義などの空間的思考に頼り、さらに精神的な常同症が起こるとした。

しかし、この記述を引用するまでもなく、「離人症」とベルグ

ソンのつながりの密接さはいかがえよう。「時間と自由」(『ベルグソン全集1』平成十三年十月・白水社)には「耳もとで発射された大砲の音とか、突然点ぜられたまばゆい光とかは、われわれから一瞬のあいだ人格意識「自我意識」をうばいさる。この状態はその素質のある人の場合には長くつづくことさえ起こりうる」といった記述があり、「物質と記憶」(『ベルグソン全集2』平成十三年十月・白水社)には「視覚的記憶を保存するだけでは、たとえ意識的にそれを行なうとしても、類似した知覚の再認には不十分なのである。しかし、反対に、シャルコの研究による視覚的イマージュが完全に蝕まれた典型として有名になつた症例では、知覚の再認がすべて消滅しているわけではない。報告を綿密に読めば容易にそのことがわかるだろう。患者はなるほど故郷の町筋の名を言うことも方角を見いだすこともできなかつたという点では、それらをもはや再認してはいない。しかし彼は、それが町であり、家が見えているということはわかっていたのだ。彼はもはや妻子を再認しなかつた。しかし彼らを認めつつ、婦人や子供たちであることをのべることはできた」、「J・エール・ジャンが記述した人格分裂症」、「若干の精神病患者が、彼らの発病についてあたえている記述を読むとよい。彼らはしばしば奇異の感、あるいは彼らの言うところでは「非現実」感を経験し、あたかも知覚される事物が彼らにとつては起状も堅固さも失つたかのようなのが見られるだろう」などの記述、「音響は依然きこえているが解釈できない」「精神聾」や「精神盲」への言及が見られる。

そして、「純粹持続」や「純粹知覚」、「純粹記憶」だが、「時間と自由」、「物質と記憶」には、

まったく純粹な持続とは自我が生きることに身をまかせ、現在の状態とそれに先行する諸状態とのあいだに境界を設けることを差しひかえる場合に、意識の諸状態がとる形態である(略)。ところが、空間の觀念になじんでいて、それに取りつかれてさえいるわれわれは、それと意識しないで、純粹の継起を思いうかべる際に空間を導入してしまう。われわれは意識の諸状態を、もはやそれらの状態相互の中にはなく、並び合うものとして、同時に知覚できるようなぐあいに並置する。要するに、空間の中に時間を投影し、持続を延長「広がり」としてあらわすので、継起とはわれわれにとつて、各部分が相互に浸透することなしに隣接しているような、持続した線とか鎖の形をもつものとなる。このようなイメージはもはや継起的ではなく同時的な後、先の知覚を含んでいること、また継起には相違ないがしかもただ一つの同じ瞬間内に入りきれるような継起があると考へることは矛盾であろうと言うこと、に注目しよう。(略) 純粹持続とは、質的变化の継起以外のものではありえないはずであり、それらの変化は、はつきりした輪郭ももたず、お互いに対して外在化する傾向ももたず、数とのあいだにいかなる血のつながりももたずに、融合し合い、浸透し合っている。それは純粹の異質性であろう。(略)

持続についてのわれわれの普通の考え方が純粹意識の領域内へ空間がしだいに侵入してくることに左右されていることをはつきり示す事實は、自我から等質的時間を知覚する能力を取り去るためには、自我が自己の調整機構として利用している心的事象の比較的表面的なあの層を、自我から取り去るだけで事足りる、ということである。夢はまさにわれわれをこのような状態に置く。なぜなら眠りは、身体器官の機能をゆるめることによって、特に自我と外的事物とのあいだの交流面を容容させるからである。そのとき持続はもはや計測されることはなく、感じられるものとなり、量から質の状態に立ちもどる。流れた時間の数学的測定はもはや行なわれず、あらゆる本能と同様にひどいあやまりもおかすが、またしばしば並はずれた確実さをもつて働くこともできる漠然とした一つの本能に、その席をゆずる。目覚めている状態においても日常の経験によつて、われわれは、質的持続、意識が直接に到達する持続、動物がたぶん知覚している持続と、いわば物質化された時間、空間内に展開されることによつて量となつた時間、とのあいだを区別することを教えられているはずである。(時間と自由)

実際には、記憶に浸されない知覚というものはない。私たちは、自分の感官の直接的な現在の所与に、過去の経験の無数の断片を配合している。しばしばこの記憶は私たちの



現実の知覚を押しつけることがあつて、その場合私たちがこの知覚から残しておくものは、若干の指示、古いイマジユを思い出させるための単なる「記号」にすぎない。そのかわりに知覚はたやすく手つとり早いものになる。しかしこれがもとで、あらゆる種類の錯覚もまた生じてくる。このような、まったく私たちの過去に浸透された知覚の代わりに、成人の完成された意識のもつ知覚でありながら、しかも現在の中にとじこもり、他のすべての仕事を斥けつゝ、ひたすら外界の対象に適合することに余念のない場合にもつであらうような知覚を考えたとして、それでいこうさしつかえない。ひとは、私たちがかつてな仮設を拵えているとか、個人的な偶然的要素をとり去つて得られたこの理想的知覚は、もはや現実とは少しも合致しないと言ふかもしれない。しかしまさに私たちが示そうと思ふのは、個人的な偶然的要素とはこの非人格的知覚に接木されるものだということ、この知覚が、事物についての私たちの認識のまさしく基礎にあるということ、それを誤認し、記憶力が加減するものからそれを区別しなかつたがゆえにこそ、ひとは知覚全体を、強度がまさる点でしか記憶と異ならぬような一種の内的で主観的な観照にしてしまったということなのだ。(略)さしあたり知覚を、具体的に複雑な私の知覚、すなわち私の記憶に充たされていつもなんらかの持続の厚みを示す知覚とは解しないように願いたい。そうではなくて純粹知覚、すなわち事実上ではなくむしろ權利上

存在する知覚と解していただきたいのである。これは、私のいる場所におり、私同様に生きている存在が、現在の内に没入し、あらゆる形の記憶力を排して、物質の直接的かつ瞬間的な観照を獲得しうる場合にもつであらうような知覚である。(物質と記憶)

諸観念、すなわち記憶力の奥底からよび起こされる純粹記憶は、展開して記憶心像となり、次第に運動的図式の中にはまり込むことができるようになる。これらの記憶は、いっそう完全な、具体的な、意識的な形をとればとるほど、ますます知覚と融合する傾向があり、知覚はそれらをひきよせるとともに、それらは知覚から枠組を採用する。(略)

一方では、じつさい、完全な知覚は、私たちがそれを迎へつつ投げかける記憶心像との癒着によつてのみ規定され、また区別される。それでこそ注意ということもあるわけで、しかも注意がなければ、機械的反応に伴う感覚の受動的並置があるのみだ。しかし他方では、もつと先で明らかにするように、記憶心像自体は純粹記憶の状態に還元される限り、無力なものに留まるだろう。この記憶は潜在的であり、それを引きよせる知覚によつてのみ現実的となりうる。それは無力であつて、現在の感覚へと物質化しつゝ、そこから生命と力を借りるのだ。(物質と記憶)

とある。「純粹持続」は「離人症」の(②風景(知覚)の(分節

的・言語的)不統一性、⑩時間軸の欠如」と、「純粹知覚」は(⑪時間軸の欠如、そのような形で記憶の蓄積(時間軸をもたない記憶)、④自分の記憶と感じられないが故の記憶の喪失(記憶そのものは残っているが用い難い)と、「純粹記憶」は(⑫風景(知覚)(分節的・言語的)不統一性、⑩時間軸の欠如、そのような形で記憶の蓄積(時間軸をもたない記憶)、④自分の記憶と感じられないが故の記憶の喪失(記憶そのものは残っているが用い難い)と、これらを実際にはあり得ぬものとしている(それは我々も認めるであろう)が、「離人症」の「私」(田村)はその体現者とは考えられないだろうか。

さらに、「道徳と宗教の二源泉」(『ベルグソン全集6』平成十三年十月・白水社)には、次のような一節がある。

この科学は最初はきわめて限られており、この科学のとらえる宇宙のメカニズムや、この科学の支配する延長や持続は、全体のこの一部にすぎない。(略)今日では、われわれは、原初的信仰——今日の科学が、その知っているもの、および知ろうと望んでいるすべてのもので、覆いかくしている原初的信仰——をふたたび見いだすためには、どうしても内観の努力を力強くこころみることが必要である。(略)われわれが気楽でいられるためには、現実の総体のなかでくつきりとわれわれの眼前にあらわれる出来事が、ある意図に衝き動かされるように見えなければ

ばならない。事実、自然的で原初的な確信は、そうしたものであろう。(略)出来事は、われわれの願いをかなえるだけの人格をもたぬし、われわれの命令に従うには人格をもちすぎている。だが、われわれの精神は、容易に、出来事をこのいずれかの方向に押しすすめるだろう。事実、本能の圧力によって、仮構機能という想像の形式が、知性そのものの内部に出現した。仮構機能は、その働くままにしておけば、原初的に描き出されるさまざま基礎的人格によって、神話の神々のごとくしだいに高まつて行く神々や、単なる精霊のようにしだいに低いものになる神性や、さらには、心理的起源のうちからただ一つの特性——純粹に機械的でなく、われわれの欲望に屈し、われわれの意志にしたがうような特性——しか保持しない力をさえ、つくり出すのである。

「延長」や「持続」を特徴とする「科学」は、(出来事はある意図によつてつき動かされている)とする原初的な信仰を押しつけてしまう。その「科学」を取り払い、知性の中の仮構機能を働くままにすることで、神話の中の神々(禁じたり予防したりあるいは罰したりするために出現する神)や「警戒的復讐的な神」等、神については、「魔術的な力や祈りがさし向けられる神々は、知性を照らすためよりも意志をささえるためにつくられたある中間的なものから、下と上に分かれて、生じたのである」、「神は一人の人物である。神は、長所も欠点(短所)があれば、性格もそなえている。名前ももっている。神は他の神々と一定の関係

を保持している。神はさまざまな重要な機能を果たし、とりわけ、その機能を果たすのは、その神だけである（いづれも「道徳と宗教の二源泉」より）といった記述が見られる。等が見出されることになる。引用を要約すると以上のようになるかと思われる。座標空間を考え出したデカルトの「延長（物質の本質は数値化・均質化された空間の中で拡がりをもつこと）」が、その中では物質の本質が「延長」ではなくなるような神的世界を消し去り、私のいる空間に同時に精霊やキツネの霊のようなものがある（キツネ憑き等）といった考え方も駆逐し、数値化・均質化された「持続（ニュートンが時間を平面化した）」が日本における草木も眠る丑三つ時（鬼等がうごめく特殊に意味付けられた時間）等の時間観を払拭したことを考えると、「科学」が原初的信仰を覆い尽くしてしまうというのもうなずける。ベルグソンは、時間的にも空間的にも非言語的（非分節的）で流動的（連続的）で無限に質的（ $\uparrow$ ↓数量的）な「純粹持続」や「純粹知覚」、「純粹記憶」等の概念で、その「科学（物質と精神の二元化（デカルト）、数値化・均質化された空間（デカルト）時間（ニュートン）に端を発し、カントが感性（時空間的認識）と悟性（具体的、一般的なものの概念等。時間と結合して現象に作用、「物そのもの」等の概念を用いて体系的にまとめた二元論、さらにはそれに関係する観念論や唯物論等を枠組とする）」の孕む矛盾を乗り越えようとした。「純粹持続」や「純粹知覚」、「純粹記憶」が、「離人症」にきわめて近いとすれば、「野火」の「私（田村）は「離人症」になることで「科学（物語としての「野火」の前半には、「自然」の中に規則性を見出すという記述が散見される）」を取り払い、それによって神を

見出したと考えられるのではないか。主に人肉食に関わる場面で神が現れるのは偶然ではあるまい。先の「道徳と宗教の二源泉」の引用の少し後には、

宗教が神神という偉大な人物にまで高まると、宗教はこれらの姿に似せて精霊を考えうるだろう。すなわち、精霊は低い段階の神々だろう。（略）いっそう正確には、それ（精霊のこと―筆者注）はこの恩恵的働きの永遠的なものであった。（略）たとえば、われわれに飲み水を注ぐといった行為がそれである。つまり、そうした行為は事物のうちに局在されるが、やがて一人の人間のうちに局在されるものが可能である。しかもその行為は、固有の、独立した存在をもっている。そして、もしその行為が限りなくつづくならば、その永続性自身によって、その行為は、人がその水を飲む水源の、人々を生気づける精霊としてうち立てられることになる。（略）死者の魂は全く自然に精霊の中に入るだろう。つまり、死者の魂は、自己の肉体から離れても、決してその人格性を放棄することはない。死者の魂は、精霊に加わると、必然的に精霊に影響を与え、さまざまな色合に色づけして、精霊を人物化させるようにする。このようにして、精霊たちは、さまざまに異なっているが一点に収斂するさまざまな道とおつて、ついには完全な人格に達するだろう。

とある。死者の魂は精霊（低い段階の神々）となり、出来事のもつ意図そのものとなり、永遠に生き続ける。このことも、神の出現とともに「私」（田村）の死の観念が、〈終着点としての死〉から〈死後の生〉へと変わる事と無関係ではないであろう。

しかし、精神病院内では、「離人症」はほぼ回復していると考えられる（私はさらに、その燃える粉殻や草が、それぞれ一つの煙に密着していると感じる）（三三九 死者の書）とあるが、「密着している」と「感じる」（解釈する）のは正常な自我の「私」であろう。「密着している」という小さか不自然な表現は、それらがもとは密着していなかったことを示していると考えられる。同様に、「意識の空間に密着したそれ等の番い」も非分節的であったと考えられよう。それらを二つに分け、空間化された時間軸上に配置する作業は、ベルグソンが指摘したところの〈通常私達の意識がしている作業（本章の「純粹持続」についての引用参照）である〉ので、小説の最後が「もし（略）」、「神に栄えあれ」（三三九 死者の書）となっているのではないだろうか。「野火」本文中には、ベルグソンの名前が二ヶ所見られ（二四 降路）、「私はかねてベルグソンの明快な哲学に反感を持っていた」とさえあるが、「私」（田村）の見出す世界は思弁的なベルグソン哲学のそれに酷似していると言えそうだ。

資料をどう扱うかについては、「意味の源泉」、〈性質を際立たせるための比較の対象〉、「思考枠組の源泉（あるいは思考枠組を形成するための議論の対象）」、「思考枠組等を解体・再構築する（される）もの」等、様々あり得るだろう。本稿では、『人格喪失感

（離人症）』にせよ、ベルグソン哲学にせよ、もつぱら〈意味の源泉〉として用いた。ベルグソン哲学に関しては、およそ実証不可能な思弁的世界の経験可能性の示唆という意味で、わずかに〈思考枠組等を解体・再構築する（される）もの〉として接してみた。最後に、どのように用いるかはともかくとして、「野火」とベルグソン哲学との間に大なり小なりつながりを見出せる事柄をいくつか列挙しておこう（いずれも「道徳と宗教の二源泉」より）。

- ・ 社会的自我と個人的自我との間の葛藤から起こる道徳的苦悩
  - ・ 第一次大戦の兵士達の〈大砲よりも銃によって狙われる方が恐ろしかった〉という報告
  - ・ 神秘家が神秘的体験を語ることと愛
  - ・ 神話における、〈物理的秩序（非自然の規則性）〉と〈道徳的秩序、社会的秩序（法律等）〉との間の境界の曖昧さ
  - ・ 見神は自分の知る宗教が教える観念に依存
  - ・ 仮構能力の豊かなひろがりから生まれる文学
  - ・ 必然（不自由）と偶然（自由）
  - ・ 神に捧げる祈り
  - ・ （生け贄の）血による、神とのつながりの深化
  - ・ 同書に見られる様々な神の紹介
- この他にもつながりを見出し得る事柄はあるが、このくらいでとどめておく。

## 五 おわりに

本稿では、(便宜上の区分だが、無数の) (同時代的な読みの可能性)、(作者の意図) (この二つの間の距離は近いこともあるが)、あるいは(今日の私達の読みの可能性(作者を含む同時代の人には見出し得ぬ、潜在的な文脈)の中の(同時代的な読みの可能性)(x軸)と、「離人症」という中心・テーマ(y軸)の交差点に主として立つて(これらの軸は、用いた資料や理論(本稿では構造主義的なそれ等)と関係して) テクストの読みを考えてみた。すべての作品や書簡を基礎としているが故に一見作者の意図に比重を置いているように見える、不透明な作者像をつくつての読みとの間には溝がある。 (女性の描写一つ一つの間の差異を切り捨て、全てを性的なつながりの対象と捉える等の構造主義的な読みは、単純化することで(一つ一つの描写の、そして個人間の)細かいニュアンスの違いを消すがゆえに、より幅広い時空間で共有される)と考えられるとすれば、本稿は翻訳文学としての「野火」を考える上でも意味がある。ともあれ、機会があれば(「離人症」を含む)複数の中心・テーマ(y軸、z軸、...)をもつ立体的・複眼的な読みを試み、「野火」をより一層豊かなものにした

#### 【注記】

1 「私」(田村)が書いている今。記述はその大部分が体験の時間と書いている今にまたがってはいるが。

2 『記憶の病理』(昭和二十九年十二月 みすず書房)にも同内容の記述

で見られる。

3 左右の身体の分裂については、⑥身体の不随意ではなく、ヒステリーではないかと考えるが、指摘のみにとどめる。

4 「物質と記憶」には、「このいわゆる等質的時間は、他のところで証明を試みたように、言語の偶像であつて、容易にその起原の見つかる仮構である」、「しかしまさしく私たちが二元論を極端まで徹底したことから、私たちの分析はおそらくその相矛盾した諸要素を引きはなしたのである。そのさい一方では純粹知覚の理論、他方では純粹記憶の理論が、非延長と延長、質と量との間に、接近の道を準備することになる」、「このようにして私たちは、長い回り道をへて、本書の第一章でとり出しておいた結論に立ちもどってくる。すでにのべていたように、私たちの知覚は元來精神ではなくむしろ事物の内に、私たちの内ではなくむしろ外にある。さまざまな種類の知覚は、それぞれ実在の眞の方向を示している。(略)意識と物質、精神と身体は、こうして知覚において接触するにいたつた。しかしこの觀念は、一面なおあいまいなところがあつた。というのは私たちの知覚、したがつてまた私たちの意識は、このとき物質に帰せられる分割可能性を共有しているように思われたからである。私たちが二元論的仮説において、知覚される対象と知覚する主体との部分的合致をみとめることにおのずから反発するわけは、自分の知覚には不可分の統一を意識するのに、対象はというと、本質上、限りなく分割可能なように思われるからである。それがもつて、意識は延長的多様に直面しつづ、ひろがりのない感覚をもつという仮説がでてくる。しかし、もし物質の分割可能性が、まったく物質への私たちの働きかけ、すなわち物質の局面を変化させる私たちの能力にかかわるものであり、物質その

ものではなく、この物質をうまくとらえるためその下に張りわたす空間に属するとすれば、もう困難は消え失せてしまう。延長をもつ物質は、全体として考察すれば意識のようなものであって、そこではすべてが平衡を保ち、補い合い、中和しているのである。それはまぎれもなく私たちの知覚の分割不可能性を呈示するのだ。(略)まさにこのことから、私たちの全研究の焦点をなす問題、すなわち精神と身体の統一の問題が、ある程度まで解明される。二元論的仮説でこの問題がやっかいなのは、物質を本質的に分割可能なものとみなし、精神の状態を、厳密にひろがりのないものとみなすことによつて、はじめに両項の連絡を絶つてしまふところからくるのである。それで、この二重の要請を深く追求してみ

ると、物質にかんしては、具体的な不可分の延長とその下にひろがる空間との混同があり、同じくまた精神にかんしても、延長と非延長との間には、程度もなく可能な推移もないという幻想的観念がそこに発見される」とある。

#### 【付記】

「野火」の本文は『大岡昇平全集』第三卷(平成六年十一月 筑摩書房)に拠る。全ての引用文中の傍線(「野火」本文に限らず)は筆者が付したもので、ルビ等は省略し、漢字も適宜新漢字に改めた。

(九州大学大学院人文科学府博士後期課程一年)